

# トニ・モリスンの*The Bluest Eye* (『青い眼がほしい』) の沖縄における読みの実践 —文化研究の手法と多言語的アプローチ—

崎 原 千 尋

## 要 約

アメリカ文学の講義を担当するにあたって、いかにして沖縄の学生たちが黒人文学を身近な歴史や、社会、文化と関連づけて読み解き、さらに、*race* (人種)、*gender* (ジェンダー)、そして*class* (階級) という概念をクリティカルに分析する視座を身につけることができるのか、ということを常に問い続けて来た。本稿は、このような問いを基点とし、トニ・モリスンの*The Bluest Eye* (1970) を教材とした実践例を取り上げながら、文化研究の手法と「うちなーぐち」を使ったペダゴジカルな試みについて論述する。具体的には、(1) 関連づけ：沖縄の歴史的、文化的文脈に関連づけさせ、親近感を持たせること、(2) 可視化：視覚教材を用いて問題を可視化させ、分析概念を例示すること、に焦点を当て、学生たちが自ら進んで問題に対して取り組み、主体的かつトランスナショナルな学びが可能になることを示唆する。

キーワード：英文学教授法、アメリカ黒人女性文学、カルチュラル・スタディーズ

## はじめに

沖縄キリスト教学院大学において「米国作品研究Ⅰ」という授業を教えるという立場に立った時、いかにして沖縄の学生がアメリカ文学をグローバルな社会問題や身近な沖縄と関連性 (relevancy) のあるものとして捉えることができるのか、という課題に直面した。本学の学生の多くにとって、アメリカに対する興味はあっても、文学というだけで「難しい」とか「つまらない」というイメージが先行しており<sup>1)</sup>、語学力も十分とは言えない学生たちにとってアメリカ文学作品を原書で読むことは容易ではない。その上で、学生が文学を通して社会問題を読み解くことへ効果的に導いていくには、どのようなペダゴジカルな工夫が必要であろうか。

本稿は、沖縄の学生たちが、アメリカ黒人文学を通して、人種差別や女性の抑圧、白人至上主義というような政治的、社会的テーマを読み解く力を養う方法論について、トニ・モリスンの処女作、*The Bluest Eye* (『青い眼がほしい』1970) を取り上げた授業実践例を基に論述することを目的とする。

学生たちの文学に対する関心が薄いという背景には、日本の大学全体の英語教育において、1980年代以降から伝統的な「文学」という分野に代わって英語実践運用能力に焦点をあてた「語学習得」や「コミュニケーション」に重きが置かれてきたという状況が指摘できる (高橋 47-48)。かつては日本の英文学研究は「人

文学系の諸分野を牽引し、圧倒的な存在感を示してきた」が、今では「教養主義・主知主義」、「浮世離れ」と敬遠され、経済産業界の要請に応えることを重視した学生が増える中で、日本の大学英文科で英文学を専攻する学生・院生の数は激減していった (宇佐見 96-97)。本学でも文学関連の授業の隔年での開講が検討されるなど、文学教育の衰退は免れない状況だと言えるが、ここでは、文学を通してグローバルな社会問題に関心を持つことの重要さはあくまでも前提とし、文学教育そのものの重要性を議論するのが目的ではないので割愛する。

## 1. 黒人文学を沖縄の歴史的、文化的文脈と重ねあわせる

文学で「社会、文化を教える」という観点から、中井は、文学「研究」が目的であれば、「過去の時代に書かれた文学作品を現代のコンテクストに置いて論じたり再解釈すること」は「アナクロニズム」だと指摘される可能性がある一方で、「文学をつうじて『社会を考える』こと」が目的であれば、「作品が書かれた時代や地域の社会と、今現在学生たちが生きている時代と地域とのあいだのつながりを考察することは不可欠である」と述べている (97)。ここでは、読者である学生たちの主体性を中心化することが、文学教授法においては重要であることが示唆されている。私はトニ・モリスンの*The Bluest Eye* を文学教材に選んだが、

沖縄の学生が黒人女性によって1960年代に生み出した作品を、より身近に捉え、さらに作品が提示する中心的な社会問題—人種差別の歴史—の理解を促すためには、中井の指摘のように、アメリカ黒人の文化や歴史を彼らが生きる沖縄と繋げていく実践が有用だと考えた。以下では、まず、実際の講義内において沖縄の学生たちと共に試みた、「沖縄の歴史的・文化的文脈を黒人文学と重ね合わせる」文学テキストの読みの実践について論述していく。

### 1-1 「うちなーぐち」（琉球諸語／沖縄語）表現と黒人の言語表現（Black Vernacular）

アメリカ黒人文化において、黒人共同体で共有される言葉（方言、黒人英語、Ebonics等さまざまな呼び名がある）は白人共同体から距離をおき、黒人の文化アイデンティティを担保するための特別な役割を果たしているという指摘がある（Holloway 34）。モリスン自身も作品のあとがきで、「わたしの言葉の選び方（話し言葉、聞き言葉、会話）…は、アメリカの黒人文化の複雑さとゆたかさを、その文化にふさわしい言語に変形しようとする試みである」（モリスン 314）と述べている。

白人が使う「標準」的な、あるいは「正しい」英語に対比して、アフリカの口承伝統をルーツに持つ黒人の言葉づかいやリズムを中心化し、言語化するモリスンの企ては、物語の語り手であるクローディアが母親と母親の友人との会話について描写する場面で読み取ることができる：

彼女たちの会話は、ほんの少し意地悪なダンスみたいだ。音が音に出会い、おじぎをし、シミーを踊って、退場する。別の音が入ってくるが、新しい別の音に舞台の奥へ押しやられ、二つの音がおたがいのまわりをくるくる回り、やがて止まる。言葉は上へ上へと螺旋形を描いてのぼってゆくこともあれば、また耳障りな跳躍をすることもある。そうして、すべてにゼリーでできた心臓の鼓動のような温かく脈打つ笑いの句読点がつけられる。彼女たちの感情の鋭さや、ためらいや、突き入り方は、いつもフリーダとわたしには、はっきりわかる。わたしたちは、おとなが口にするすべての言葉の意味はわからないし、知ることもでき

ない。まだ九歳と十歳の子供なのだから。そういうわけで、わたしたちは彼女たちの顔や手や足を眺め、声音にひそむ真実を聞きたろうと耳をすます。（モリスン 23-24）

まだ幼いクローディアは、大人たちが話している内容をすべて理解できていたわけではないが、「感情の鋭さや、ためらいや、突き入り方」がはっきりわかり、身体の動きや声のトーンから会話の内容を把握しようとしている。このような言葉自体の意味が全部理解できていなくとも、そのニュアンスは理解できるという感覚、そして会話が「ダンス」のように響く感覚は、「うちなーぐち」（沖縄の人）が「うちなーぐち」（琉球諸語／沖縄語）で流暢に話すお年寄りたちの会話を聞く時の感覚にも似ている。

授業では、原書を読むことを前提としており、和訳は使用しないのが原則だが、英語力も十分でない上に、アメリカ黒人の文化的なバックグラウンドも持たない学生たちのテキストの読みをより積極的にするために、特に会話の部分は最初に原文のまま、そしてその後続けて、逐次通訳の要領でその場で翻訳をして再度音読し、読み進めていった。その際、和訳を朗読するのではなく、モリスンの小説の特徴である、黒人独特の言語表現を白人の「標準」英語と区別する読みの実践として、日本語と「うちなーやまとうぐち」<sup>2)</sup>を織り交ぜて音読する手法をとった。

*The Bluest Eye*には、さまざまな「家」が対照的に登場するが、クローディアのマクティア家と、実の父親にレイプされ、精神的にも完全に崩壊の運命を辿る主人公のピコーラのブリードラブ家、この2軒の黒人家庭の描写から物語は始まる。どちらもオハイオ州ロレインの炭鉱労働者の街で、貧しい暮らしをしているが、マクティア家は「暖かさや愛、共同体意識のある場所」（ポーリュー 134）であるとされている。しかし、学生たちが、原文テキストからのみ、この「暖かさや愛」のニュアンスを読み取るのはかなり難しい。特に物語の冒頭で紹介されるマクティア家は、「古くて、寒くて緑色」の家屋敷で、風邪をひいたらやさしく看病されるのではなく、母親が「思慮が足りなかったことに愛想がつかしたような顔をして、頭を横に振る。おまえたちみんなが病気になったら、だれかが何かやってくれるだろうなんて、甘いことを考えているのか、とき

く」(モリスン 16)、という風に、ナレーターのクロードディアは幼いころを回想する形で語る。

そして、クロードディアの母は顔をしかめながら、こう言う：

“Great Jesus. Get on in that bed. How many times do I have to tell you to wear something on your head? You must be the biggest fool in this town. Frieda? Get some rags and stuff that window.” (Morrison 10)

「なんてこと。さっさとベッドに入りなさい。頭に何かかぶれって、一体何度言わなくちゃいけないの？ おまえは、この町でいちばんの阿呆よ。フリーダ、ぼろを持ってきて、あの窓に詰めなさい。」(モリスン、大社訳 17)

この部分で私は原文の英語で母親のセリフを音読した後に、上記に示した和訳を読むのではなく、日本語を介さずに、この黒人の言語表現を直接、沖縄のイントネーション、沖縄の少し乱暴な言葉のリズムを「うちなーやまとうぐち」の表現を使ってこのように読む：

「はあっさよ。早くベッドに入りなさい。頭に何かかぶれって、なんっかい言わんといけんわけ？ あんたは、この部落いちばんのふら一だよ。フリーダ、だ一、あのぼろを持ってきて、あの窓に詰めておきなさい。」(筆者訳)

このように音読することによって、教室の空気感は一瞬にして変わる。学生たちが物語に一気に引き込まれていくのを感じることができると同時に、マクティア家に対する心象風景も、「貧乏でかわいそう」、「ひどい、冷たい母親」、「虐待を受けているかもしれない」というものから、確かに貧しくて、決して上品ではなく、荒々しさ、粗悪さを感じるけれども、私たちはこのような家庭を知っている、という感覚になれる。子供心を傷つけるような乱暴な態度や言葉遣いを完全に美化するわけではないが、私たちも「知っているような」家族に「暖かさ」と愛を見出す可能性が広がる。このように、「うちなーやまとうぐち」という言葉のニュアンスや響きが学生たち自らの知識や過去の経験

を呼び起こし、学生たちが自分の物語として、親近感をもって想像できるようになるのではないかと考える。

さらにクロードディアは「記憶に残っているのと同じほど、つらかったのだろうか。でなければ、むしろゆたかで実のあるつらさだったのかもしれない。」(モリスン 19) と語る。モリスンは、このように黒人家庭は下層階級(貧乏)で、だから粗悪で乱暴だ、という人種化された階級のイメージを見直すことを読者に要求する。私が「うちなーやまとうぐち」をモリスンのテキストを読むときに意識的に使用する試みは、翻って、特に若い世代がうちなーぐちを乱暴で、下品で、洗練されていない、といった印象を持ちやすい中で、「暖かさ」と愛を見出す機会にもなってほしいという試みでもあった。

## 1-2 ユタとマジカル・リアリズム (Magical

Realism) ピコーラの父親、チャーリー・ブリードラブは生後 間もなく母親にごみ山に捨てられ、伯母であるジミーによって育てられる。その伯母が病気になり、なかなかよくならないところで、マッディアが登場する：

とうとうマッディアを呼んでくることにきまった。… 彼女は有能な産婆であり、診断の確かな医者でもあった。マッディアが近くにいなかったときのことを思い出せる人は、ほとんどいない。ふつうの手段—よく知られた治療法や、直観、忍耐力—でなおすことのできない病人がある場合には、いつでも“マッディアを呼んでおいで”という言葉が口に出されるのだった。(モリスン 201)

マッディアの黒人共同体における役割は、沖縄の文化的知識がある読者であれば、沖縄の共同体における「ユタ(民間霊媒師)」と比較することができるだろう。マジカル・リアリズムとは、ラテン・アメリカ文学において注目されるようになった批評用語であるが、「現実性(日常性)」と想像的世界(非日常性、幻想性)の共存した、それらの融合した状態(佐藤 57)と特徴づけられている。この融合性は近代化、西洋化、植民地化という政治的、歴史的コンテキストの中で、信仰や神話、儀式などの土着の文化や世界観が非西洋、未開の前近代的なものとして「非正当化」されていく過程が前提にある。モリスンのマジカル・リ



アリズム的な視点は、アフリカにルーツを持つ「黒さ＝blackness」の中心化の試みであり、*The Bluest Eye*の物語中では、マッドピアというキャラクターの存在によっても読み取ることができる。このマジカル・リアリズムという文学的批評の視座は、沖縄文学における「ユタ文学研究」の分析とも通じるものがある。塩月は「シャーマニズム」という沖縄文学における概念を考察し、それが1990年代に新たに注目されてきていることについて、「自分たちの文化・歴史の独自性を主張することで、世界システムの中における弱者としての『われわれ』の発言権を増し、より優位な立場を確立することにある」（3）と議論している。このように、「ユタ文学」という批評カテゴリーは、ポストコロニアルの視点から、黒人文学と沖縄文学の接点の地平を拓く契機を示しているとも言えるだろう。

授業の中では、アフリカの口承伝統にルーツを持つアメリカ黒人独特の言語や世界観、文化が、「近代的な「白い」アメリカを背景に浮かび上がってくる感覚を、日本と沖縄の文化的な関係と結びつけて並置することを意識した。「マッドピアって沖縄だったらどういう風な存在の人だと思う？」というような問いを学生に投げかけ、マイノリティとして周縁化されてきた文化アイデンティティを中心化するモリスンの文学的試みを共有することを意識した。

### 1-3 . アメリカと沖縄：過去と現在をトランスナショナルに繋げる

この授業を担当することになってすぐの2012年、アメリカの友人たちのフェイスブックのプロフィール写真が次々とフーディー（フード付のパーカー）を着た写真に変えられる、ということが起こった。これは、フロリダ州のアフリカ系アメリカ人で当時17歳の高校生であったTrayvon Martinがコンビニエンスストアから親戚の家へ歩いている際に、「フーディーを着て怪しい」という理由だけで、自警団長のGeorge Zimmermanが射殺し、その後無罪になるという事件

（Wikipedia contributors, “Shooting of Trayvon Martin”）に対して起こった抗議運動の一環であった。これは後に“Black Lives Matter”運動と発展していったのであったが、2014年のミズーリ州ファーガソンで黒人青年の警察による殺害事件（いわゆるファーガソン事件）後はさらに運動は拡大していった。ア

メリカのメディアでも大きく取り上げられ、Black Lives Matter運動（以下、BLM運動）は「全米を圧巻し」、全国からファーガソンに向かって行進するという、「まさに1960年代公民権運動を思わせるような」様相を呈していった（藤原「アメリカ人の人種対立」）。しかしながら、アメリカの大学という場で大きく拡大していったこの社会運動の様子（Somashekhar, “How Black Lives Matter, born on the streets”）を知る学生はほとんどおらず、当時を振り返ってみても、日本の主要メディアにおいてリアルタイムで大々的にこのBLM運動が取り上げられていた印象はない。BLM運動について知っているという少数の学生たちでも、他の授業で触れられていたとか、SNSで見かけた程度で、アメリカで今まさに起きている社会運動の歴史性や政治的な意味を肌で感じ、批判的に理解するには程遠いのが現状であった。有名なスポーツ選手がBLM運動に連帯を表明し（Liu, “Time to turn protests into change”）、また国民的歌手であるビヨンセが新曲のミュージックビデオで警官が黒人少年を射殺するイメージを盛り込むなど（Settembre, “Beyonce brings mothers”）、アメリカに住んでいなくともインターネットメディアを通じてBLM運動の情報を得ることは難しいことではない。ここで重要なことは、英語に高い関心を持って本学に入学してきて、アメリカに対する興味関心の高い学生たちが、グローバルな現代社会においてアメリカについての情報に容易にアクセスできるにも関わらず、「全米を圧巻」する程の社会運動について知らないということである。トランプ政権が成立してからは、「人種差別」や「白人至上主義」といった用語が日本のメディアでも報じられるようになったが、学生たちがモリスンの物語と出会うのと同様に、自分たちが生きるグローバルな現代社会の諸問題について、トランスナショナルに関連づけるきっかけづくりが重要だと感じた。

モリスンの文学は「特定の目的をもった歴史的記述に溢れて」おり、「『青い眼がほしい』は読者に、調査し、問いを発し、もっと発見するように促す」とポーリューは評する（128）。実際の授業現場では、アメリカの現代と歴史を国境を越えて沖縄と繋げるために、“Black Lives Matter”というキーワードと共に、“Black Power,” “Black is Beautiful”や、グレイト・マイグレーション、リンチ、奴隷解放宣言などと

いう歴史的キーワードを与えて、調べ学習の課題をテキストの読みと並行して取り組ませた。このように教師側も常に学生たちが生きている「今」に目を向け、モリスンの文学テキストと交差する、常に生産され続ける他の文化テキストや出来事を常に「調査」し、発見して、文学テキストと関連する歴史的、文化的アーカイブをアップデートする必要があることも指摘したい。

## 2. 物語を視覚化する：「読む」と「見る」こと

*The Bluest Eye*を読むとき、今なお人種差別という社会問題があるということや、黒人の抑圧されてきた歴史や経験について、沖縄の学生たちが対岸の火事程度に受けとめ、単に「黒人はかわいそう、人種差別は許せない」といった表面的な理解に留まらないことが重要だと考えた。人種差別は単なる個人の偏見の問題ではなく、アメリカ社会のシステムとして、どのように人種が歴史的、社会的に構築され、権力関係が複雑に再生産されているかを問い、さらにそのシステムは必ずしもアメリカの国境内に留まっている問題ではないことにも気づくことが重要である。

そのために、まず私は、黒人を被差別者として他者化する視点からではなく、逆に標準化され、自然なものとして異質感を持たない「白さ＝whiteness」を前景化し、可視化することから試みた。まず、重要なことは、この不可視の「白さ」は、「非人種化された社会地位」である（ボーリュー 312）という指摘である。この不可視な「白さ」は、モリスンの作品の中でも読み取ることができる。白人の登場人物や文化的アイコンは物語の中に登場するが、「白人」であるという人種についての直接的な説明はほとんどない。髪の毛が黄色だとか、ピンク色の頬、そしてイタリア系

（Villanucci）やユダヤ系（Yakobowski）を髭髷させる苗字というようなパズルを組み合わせ、「白さ」を可視化していく読みが試される。学生たちには、リアルなコミュニケーションの場や、また、メディアによって媒介され表象された文化テキストにおいても、黒人に比べて、「白人を見て人種を意識すること」が少ないことに気づかせることから始めた。

*The Bluest Eye*は1940年代のアメリカでは広く公教育の場で流通していた子供向けの読本である「ディックとジェーン（Dick and Jane）」の一節から始まる：

Here is the house. It is green and white. It has a red door. It is very pretty. Here is the family. Mother, Father, Dick and Jane live in the green-and-white house. They are happy.

（Morrison 3）

この小学1年生程度の限られた語彙や短い文章から読み取れる風景は、文字だけで読むと、「ディックとジェーンの緑と白と赤いドアの家」、「父と母」、「猫と犬」がいて、「楽しい家族団らん」の様子が想像できる。しかし、次に述べるそれ以上のこと、例えば、白人家族であることは、この教本がアメリカで流通していたことについての知識がない読者にとって、文字情報からだけでは知ることとは困難である。

「モリスン事典」によると、モリスン文学の教師としての役割は、「作品が要請する能動的で参加する読みを促すこと」だと述べられている（ボーリュー 22）。この「ディックとジェーン」の一節は、読者に対して、明らかに文化的共通理解を要求しており、能動的な読みをするためには、その文化的な理解に沖縄の学生たちを導かなければならない。そのために有効な補助テキストとして、学生たちには視覚的なイメージ（図1）を提示し、作品の中での文学的な描写と視覚的補助教材との二つのテキストを交互に重ね合わせて読む、インターテクスチュアルな読みの実践の機会を与えた。

視覚的なイメージから読み取れるのは、家は、「郊外の庭付き一戸建て」で、車があり、母親はキッチンで料理し、子どもの面倒をみている様子から専業主婦であることがわかる。学生たちは、父親や母親の髪型や服装などからも、この家族がある程度、経済的に安定していて、何不自由のない幸せそうな家族だということを読み取ることができた。しかしながら、「この家族が白人である」という気づきはすぐには出てこなかった。この時に、黒人は特別な「人種」として認識されやすいことに対して、白人が人種化されないことについて学生に議論を促した。

また、ここでは、「人種＝race」に加えて、「階級＝class」と「ジェンダー＝gender」という分析概念を導入する。「幸せ」という価値付けや、また日本や沖縄における「アメリカ」という国のイメージが、家族像というテキストの中でどのように上記の3つの社会

的カテゴリーによって読み取れるのかを具体的に分析させた。

この「ディックとジェーン」教本は、モリスンの物語の中で繰り返し象徴的に使われているが、モリソンは1990年のインタビューで「マスターナラティブ」について、こう語っている：

No, it's white male life. The master narrative is whatever ideological script that is being imposed by the people in authority on everybody else. The master fiction. History. It has a certain point of view. So, when these little girls see that the most prized gift that they can get at Christmastime is this little white doll, that's the master narrative speaking. "This is beautiful, this is lovely, and you're not it."

("Toni Morrison on Love and Writing (Part One)")

上記では、マスターナラティブとは、「特権のある側が他者に課すイデオロギー的なスクリプトである」と述べられているが、それは常識や価値観を定義することのできる権力関係を孕む。この「幸せそう」な中流階級の白人家族のイメージにおいて、白さは非人種化される一方で、「黒さ」はそもそも存在しない。そこで、モリソンは「ディックとジェーン」の一節をモチーフとして繰り返す中で、表記や行間、句読点などが次第に消え、文としての機能を失い、意味を持たない、ただの文字の集合体と化していく技法を駆使している。そのような文学的技法によって、モリソンは家庭や学校といった社会システムの中に存在する白人父

権主義的（white patriarchy）なマスターナラティブを可視化させ、読者に違和感を持たせる。このような読みの経験を通して、学生たちは、「白さ」や母親や父親のジェンダー的な役割、ヘテロセクシャルな家庭が理想として規範化されていることについて批判的に考える契機が与えられる。

このように、「作品が要請する能動的で参加する読み」を学生に促すために、教員が作品中のテキストから具体的なマスターナラティブの例を引き出し、学生たちが積極的に解釈へ参加することに導くことができる。私は、歴史的な出来事を社会史的に学ぶ調べ学習に加えて、作品の中で登場する映画や食べ物、北部の肌のトーンの明るい「ブラウン」な黒人女性たちが読む雑誌や彼女たちが好んで使用する石鹸など、物語の中にあるポピュラーカルチャーに焦点をあてて、実際の視覚的なイメージを文化テキストとして提示した。

（図2）。そのような視覚的な「白さ」を読み取る練習と同時に、物語の中の登場人物たちが、「白さ」を内在化していくプロセスを重ね合わせることで、学生たちが、自主的に「私たちのマスターナラティブは何か」という問いを立てることに繋がっていった。

黒人の物語を読むということは、黒人がどのように表象されているか、ということと切り離せない。カルチュラル・スタディーズを代表する理論家、スチュアート・ホールは、表象（representation）の政治性を理論的に捉える重要性についてこう述べている：

表象とは何か、それがどのように作用しているのか、特に「差異=difference」を扱うとき、それは様々な気持ちや、態度、感情と関わり、我々見る側が、シンプルに、常識に及ぶ範囲以上の恐怖



図1. 『ディックとジェーン』に描かれる家族像

Pinterest.jp. 22 Sep. 2017, <https://www.pinterest.jp/auntieklm/illustration-dick-jane/?autologin=true>.



や不安を呼び起こす。(Hall 226、著者訳)

まず、白人に比べて、黒人とは身近にそれほど多くは出会わないであろう環境にある本学の学生たちが、文学を通して黒人に出会うとき、私は、肌の色、すなわち「人種」によって立ち表れる、「差異」によって、学生たちが読み手として「恐怖や不安」を感じることをいかに回避するかを意識した。ホールはさらに、西洋文化の歴史的な文脈において、いかにして黒人が社会的、文化的に「人種化」され、「他者化」されてきたかについて理論的な分析を行いながら、ステレオタイプ化は、「社会的、象徴的な順番付け“social and symbolic order”(258)を維持するシステムの一部であると指摘している。私はモリスンのテキストを読むにあたって、「黒さ」と「白さ」は相関的に、同時に社会的、歴史的に構築されているプロセスに注目することを意識して授業を組み立てた。そして、そこには不平等な権力関係(power relation)が潜むことを明らかにしつつ、黒人を他者化することによって再生産されてきた、歴史的な不平等な権力関係を、逆に白人を可視化することによって、その「順番づけ」に介入していくということも、文学を「教える」という実践を通して試みたことであった。



図2. 視覚的なイメージの文化テキスト提示

主人公のピコラや、クローディアの姉が夢中になっている、当時絶大の人気を博したシャーリー・テンブル(Shirley Temple) ; [dailymail.co.uk](http://dailymail.co.uk). 22 Sep. 2017, [www.dailymail.co.uk/tvshowbiz/article-560626/Shirley-Temple-superstar-childhood-destroyed-Hollywood.html](http://www.dailymail.co.uk/tvshowbiz/article-560626/Shirley-Temple-superstar-childhood-destroyed-Hollywood.html).

## まとめ

本稿では、トニ・モリスンの*The Bluest Eye*という黒人女性による文学を教材として、沖縄の学生たちが、人種差別を中心とした社会問題を批判的に読み解いていく方法論について、実践例を挙げながら論述した。はじめ

に、沖縄の言葉や文化的現象を用いて、黒人の言語表現(Black Vernacular)を身近に感じ取ってもらうというアプローチで、学生たちの興味・関心を引き出し、物語の内容について理解を深めた。これは、アメリカ黒人を「他者化」しない試みでもあり、モリスンが典型的な白人の家庭像に対比される黒人家庭のイメージをどのように描写しているかについて考える導入を与えた。また、アメリカの歴史、特にアメリカ黒人の歴史と今を知るために、メディアテキストやキーワードを与えた調べ学習を行い、より文学テキストを歴史的コンテキストと関連づけて考える実践を促した。

次に、視覚的教材を用いることで、文字だけではわかりにくい、人種差別や白人至上主義(white supremacy)といった、テキストに内在する黒人たちを取り巻くさまざまな社会問題について「可視化」することを試みた。教本や、映画の広告、女性用美容商品などに「描かれている」こと＝「白さ」の不可視性から「描かれていないこと」あるいは「排除されていること」＝「黒



北部の「ブラウン」系の黒人女性たちが、髪をまっすぐにするために使用した美容商品 ; [flickr.com](http://flickr.com). 22 Sep. 2017, [www.flickr.com/photos/vieilles\\_annonces/4040894209](http://www.flickr.com/photos/vieilles_annonces/4040894209).

さ」について、文化研究の手法を使って視覚的なテキストを「読む」実践を行った。このようなインターテクスチュアルな方法により、学生たちの文学テキストの読みはよりダイナミックに、参加型のものになっていった。

本文では十分に分析することができなかったが、物語への理解が深まれば、学生たちが自ら進んで文学が導く社会問題に対して取り組むようになり、主体的な学びが生まれるようになることについて、今後は、学生たちから得られたフィードバックや読み手側のテキストとの関係を分析することで、本稿で紹介した方法論の有効性を分析していきたい。

## 註

- 1) 学生評価アンケートで授業を受ける前のアメリカ文学のイメージを聞いてみた。受講の動機は科目の内容に興味があった、と答えた学生は多かったが、受講前の文学のイメージについては「難しい」「つまらない」という声があがった。
- 2) 「うちなーやまとうぐち」は、学術用語ではないが、ここでは便宜上、「沖縄社会で広く話されているうちなーぐちの影響を強く受けた日本語のヴァリエーション」の意味で用いる。

## 引用文献

- Hall, Stuart ed. *Representation: Cultural Representation and Signifying*. London, Thousand Oaks, and New Delhi: SAGE Publications Ltd, 1997.
- Holloway, Karla F.C. “The Language and Music of Survival.” *Modern Critical Interpretations: Toni Morrison's The Bluest Eye*, edited by Harold Bloom, Chelsea House Publishers, 1999, pp. 33-43.
- Liu, Eric. “Time to turn protests into change.” *CNN*, 4 Apr. 2014, edition.cnn.com/2014/12/03/opinion/liu-meaning-ferguson-protests. Accessed 19 Sep. 2017.
- Morrison, Toni. *The Bluest Eye*. New York: Vintage International, 1970.
- Settembre, Jeanette. “Beyoncé brings mothers of Black Lives Matter Movement to VMAS.” *New York Daily News*, 29 Aug. 2016, www.nydailynews.com/entertainment/beyonce-brings-mothers-black-lives-matter-movement-vm-as-article-1.2769297. Accessed 19

Sep. 2017.

Somashekhar, Sandhya. “How Black Lives Matter, born on the streets, is rising power on campus.” *The Washington Post*, 17 Nov. 2015, www.washingtonpost.com/national/how-black-lives-matter-born-on-the-streets-is-rising-to-power-on-campus/2015/11/17. Accessed 1 Sep. 2017.

“Toni Morrison on Love and Writing (Part One).” *Moyers & Company*, 11 Mar. 1990, billmoyers.com/content/toni-morrison-part-1/. Accessed 31 Sep. 2017.

Wikipedia Contributors. “Shooting of Trayvon Martin.” *Wikipedia, The Free Encyclopedia*, 12 Sep., en.wikipedia.org/wiki/Shooting\_of\_Travon\_Martin. Accessed 19 Sep. 2017.

エリザベス A. ボーリユー編、『トニ・モリスン事典』、荒このみ訳、雄松堂出版、2006年。

トニ・モリスン著、『青い眼がほしい』、大社淑子訳、早川書房、2001年。

宇佐見太市、「日本の英文学研究」考、『関西大学外国語学部紀要』、第9巻、2013年、95-116頁、『関西大学学術リポジトリ』、kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/9629。

塩月亮子、「表象としてシャーマニズムー沖縄の映画と文学にみるアイデンティティ・ポリティクスー」、『哲學』、第107集、2002年、1-20頁、『CiNii Articles』、ci.nii.ac.jp/naid/110007409395。

佐藤道夫、「魔術的リアリズム」についての研究、『都留文科大学研究紀要』、第57号、2002年、55-62頁、『都留文科大学学術機関リポジトリ』、trail.tsuru.ac.jp/dspace/handle/trair/416。

中井亜佐子、「社会・文化を教える：人種・階級」、『教室の英文学』、日本英文学会（関東支部）、研究社、2017年、92-99頁。

藤原帰一、「アメリカの人種対立ー多様性の尊重に揺らぎ」、『東京大学政策ビジョン研究センター』、2016年7月21日、pari.u-tokyo.ac.jp/publications/column148.html、（参照2017年8月31日）。

高橋和子、『日本の英語教育における文学教材の可能性』、ひつじ書房、2015年、47-48頁。



# Teaching Toni Morrison's *The Bluest Eye* at a University in Okinawa: Cultural Studies Strategy and Multilingual Approach

Chihiro Sakihara

## Abstract

This paper stemmed from the pedagogical question of how the undergraduate students in Okinawa can find African American literary texts as relevant to their lives, and how they can engage themselves in critical categories of analysis such as race, gender, class, and sexuality. Based on my own teaching practices, this paper focuses on applying cultural studies methodology and utilization of Uchinaaguchi (Okinawan indigenous language) to the reading of Toni Morrison's *The Bluest Eye* (1970). Especially, I will illustrate how juxtaposing the visual texts and Okinawa's cultural and historical contexts with the narrative. In doing so, I argue that Okinawan students can actively engage with Morrison's text transnationally as a reader.



# *The King from Ashtabula* —ヴァーン・スナイダーの第二の沖縄小説—

渡久山 幸 功

## 要 約

沖縄を舞台にした小説『八月十五夜の茶屋』（*The Teahouse of the August Moon* 1951）の著者ヴァーン・スナイダーによる小説*The King from Ashtabula*（1960）は、東シナ海に浮かぶNakashima Islandsという架空の島々が舞台となっているが、沖縄文化・歴史をモデルにしていることは明らかである。この小論では、本作品をスナイダーによる「第二の沖縄小説」と位置づけ、冷戦時代の共産化を忌避する米軍占領統治政策への風刺的な批判と極東アジアにおける財政支援の重要性を強調するスナイダーのメッセージ（哲学・理念）及びアメリカ民主主義に対するパロディ文学の意義の解明を試みた。*The King from Ashtabula*は、*The Teahouse of the August Moon*の延長線上に位置する非現実的・非政治的な空想物語となっているが、米軍占領下の駐留・基地問題を無視しながらも、究極な形でアメリカ民主主義を推し進める「脱植民地化」（decolonization）のテキストとして読まれるべきである、と結論付けた。

## はじめに

沖縄が舞台となったハリウッド映画『八月十五夜の茶屋』（*The Teahouse of the August Moon* 1956年、以下*The Teahouse*と表記）は、当時若者に絶大な人気を誇ったマーロン・ブランド（Marlon Brando 1924-2005）が、イエローフェイスの意匠の沖縄人通訳を演じた珍しい作品として多くの人の記憶に残る映画である。この映画は、小説家ヴァーン・スナイダー

（Vern Sneider 1916-81）の同名タイトルの小説を、劇作家ジョン・パトリック（John Patrick 1905-95）が戯曲用に脚色し、ブロードウェイで大ヒットした作品を殆どそのままの形で映画化したものである。原作者スナイダーは、米軍の沖縄本島の上陸作戦の1945年4月1日に沖縄に上陸し、その後、同年9月まで現在の沖縄市の桃原地区で民政官（教育担当）として任務に就いた時の実体験を基に*The Teahouse*を書き上げた。同小説は1951年に出版されるとベストセラーとなった。スナイダーは、その後1953年に第2作目にあたる台湾を舞台にした小説*A Pail of Oysters*を出版した後、1960年に第3作目の長編小説*The King from Ashtabula*（以下*The King*と表記）を出版した。この作品は、架空の島々 Nakashima Islandsが舞台となっているが、その島民の生活様式や習慣・文化の描写や植民地化された王国としての歴史は、沖縄の状況と酷似している設定は無視できない事実である。初版本は最初の5日間で15,000部を完売しているが、この作品は非現実的な空想小説という枠組みの中で理解さ

れてきたためか、本格的な学術研究がほとんどないのが現状である。

小論では、*The King*を「1950年代の米軍統治下の沖縄」をモチーフとしたスナイダーによる第二の沖縄小説として位置づけ、*The Teahouse*と本作品の類似点と相違点を指摘し、スナイダーの沖縄（人）表象・描写及び、軍事占領下のコンタクトゾーンにおける沖縄とアメリカとの異文化理解を分析しながら、スナイダーが再び沖縄を舞台にしたパロディ文学を執筆した意図、および米軍占領政策に関する彼独自のメッセージ（哲学）を解明する試みである<sup>1)</sup>。

## I. *The King from Ashtabula*のあらすじ、沖縄小説としての位置づけの妥当性

テキスト分析に入る前に、日本・沖縄ではほとんど知られていない*The King*のあらすじを少し長くなるが、紹介したい。舞台は米軍が統治する架空の島Nakashima Islandsである。かつて王国であったこの島は、340年間中国と日本の植民地下にあったが、第二次世界大戦以降、アメリカ軍が駐留統治していた。統治を始めて15年経った頃、自治権に関する住民投票が行われる。アメリカ当局は、戦後アメリカ民主主義を体験した現地住民は、民主主義政治体制を選択するだろう、と確信していたが、住民は、初めて与えられた選挙権を行使して君主制への回帰を選択する。アメリカによる占領統治の失敗を意味するこの予期せぬ選択は、米軍当局を動転させ、共産主義者のサボター



ジュに起因するものだと米軍政府は考える。1620年  
以来の中国と日本の侵略によって「中断・休止」(the  
Interruption)されていたにもかかわらず、340年も途絶  
えていた王家(King Gihon)の正当な子孫が存在する  
ことを知ってアメリカ当局は非常に驚くが、その王位  
継承者は、オハイオ州のAshtabula市にあるCambridge  
Collegeに米留奨学金制度で派遣されていた19歳の学生  
Kenji Nakamuraであった。この若い王候補に統治能力  
がなければ、住民投票の結果が無効になることを期待  
するが、結局Nakashima Islandsが数世紀ぶりに王政に回  
帰することを米軍政府は渋々認める。新しく王について

King Kenjiは、たまたまNakashima

Islandsを訪れていたアメリカ人大学生のElwood  
Cummings (米軍民政統括官 General Matthew  
Scheick の妻の甥)の助けを借りながら、17世紀の王  
King Gihonが残した巻物を参考にして、王国の再建に  
奮闘する。物語が進行するにつれて、現地民の慣行、習  
慣、文化、価値観などが丁寧に説明され、また、同時に  
必要とあれば、アメリカの文化や経済政策を取り入れて  
いく。特に、共産・社会主義的な政治体制になることは  
ないと分かると君主制に懐疑的だったアメリカ当局も王  
国再建に理解を示すようになっていく。

King Kenjiは、紙芝居(Paper-show Company)の  
会社を設立し、紙芝居の時にサツマイモのお菓子を販  
売したり、アメリカ軍人の奥さん方から投資を募って  
養鶏経営を開始したりする。お見合い結婚を禁止する  
the Scheick Codeは、地元住民にとっては不都合なもの  
であり、King Kenjiは、未婚の男女が集う「お見合いフ  
ェスティバル」(The Festival of Unattached)を開催す  
ることを計画する。Nakashima Islandsの貨幣システム  
が日本本土で信用がないことが大きな問題  
となるが、東アジア圏の共産化を防ぐという大義名分  
でアメリカ政府から2,000万ドルの財政援助を受ける  
ことになり、王国の事業が開始される。その融資で  
アメリカの豚を輸入し、豚と土地を農家に割り当て、  
養鶏・養豚経営を王国の経済の柱にすることを計画す  
る。最終的にこの「お見合いフェスティバル」で、  
King Kenjiと彼と同じように米留中に強制的に帰国させ  
られたDebbie Shizu Nakasone (Duchess of Bamboo  
Island)との婚約が決定し、Nakashima Islandsが王国と  
して再出発するところで物語は幕を下ろす。

近年になってアメリカで相次いで発表されている

The Teahouseに関する論考の中では、The Kingを沖縄の題  
材に戻った作品として受け止めている。例えば、Danielle  
Glassmeyerは、架空の島Nakashima Islandsは沖縄の別名  
であると指摘している(“Sneider’s novel The King from  
Ashtabula (1960) returns to an Okinawa renamed to imagine the  
islanders’ ancient monarchy revived and displacing the  
Occupation army” [Glassmeyer p.428])。また、Nicholas Evan  
Sarantakesも、沖縄が別の諸島として登場するにもか  
かわらず、架空の島は琉球をモデルにした地域であ  
ると指摘している(“Sneider set his new novel in the  
fictional islands, which he  
clearly modeled after the Ryukyus, even though it  
mentioned Okinawa in the narrative as separate  
archipelago” [Sarantakes p.177])。沖縄・琉球を連  
想させるものは具体的にどのようなものだろうか。

#### 沖縄を連想させる表現・描写：

地 理：日本と中国の間、東シナ海に位置する15の  
島々からなる。

歴 史：王国時代には、国際貿易で栄えた時代があった。  
その後、中国、そして日本の植民地になる。  
現在は、米軍政府によって統治されている。

歴代の王の名前：

Shinerikyu (しね りきよ)、Amamikyu  
(あまみきよ)、King Gihon (義本)、  
King Eiso (英祖)、King Satto (察度)

言 語：日本語

沖縄の地名や沖縄人に多い人名：

Little Koza, Tamabaru, Tobaru, Tamagusuku  
Castle, Kunigami Square,

Takamini ( e?), Maebaru, Takaesu,  
Goya, Nakasone, Nakamura, Shiroma,  
Tatami Oshima (奄美大島を連想させる)

食 文 化：お酒泡盛、主食のさつまいも栽培、ブタと  
ヤギの飼育

風習・文化：ハジチ 模合のシステム (mutual loan  
association/society) 三味線 (samisen) 通

貨：現地の通貨(沖縄で流通していた軍票B円  
を想起させる)

教育制度：王政時代の中国への留学(福州大学)、日  
本植民地時代の日本への留学、米軍統治下

の米留のシステム

そ の 他：家屋の作り（ヒンブンなど）、赤瓦の屋根、  
芭蕉布の衣服など

このような沖縄を連想させる数々の描写から、スナイ  
ダーが沖縄をモデルにして架空の島Nakashima

Islandsを案出したことは疑いなく、*The Teahouse* 執  
筆時よりも詳細に沖縄の風習や文化をスナイダーが研  
究したことは明白である<sup>2)</sup>。

## II. *The Teahouse of the August Moon* と *The King from Ashtabula*の比較検証

沖縄を舞台にした小説を再び書いたという観点から  
*The Teahouse*と*The King*の類似点と相違点の分析は重  
要である。おおまかに整理してみると下記のような  
だろう。

### 類似点

- (1)戦争における日米間の戦闘シーンや米軍駐留にお  
ける米軍の事件・事故・訓練の描写が全く描かれて  
いない。
- (2)上記(1)が理由で、空想的な（非現実的な）要素が  
ストーリーの中核を支配している。（米軍占領下の  
沖縄実態とかけ離れている。）
- (3)アメリカ人と沖縄人・現地人との相互理解がうま  
くいっていることが描かれている。
- (4)地元住人同士にラブロマンスが描かれ、最終的に  
結婚に至る。アメリカ人と地元民の恋愛関係はない。  
（パトリック翻案の戯曲版ではアメリカ人Captain  
Jeff Fisbyと沖縄人芸者Lotus Blossomの恋愛関係がほ  
めかされているが、原作にはない。）
- (5)アメリカ軍隊組織、駐留政策及びアメリカ民主  
主義への懐疑・不信感
- (6) Tobiki villageとNakashima Islandsの経済再建が最重  
要課題として描かれている。

### 相違点

- (1) 主人公 が*The Teahouse*ではアメリカ 人Captain  
Fisby、*The King* では、現地人King Kenji Nakamura  
となっている。
- (2)*The King*では、アメリカ人女性（主に軍人の妻） が  
登場する。つまり米軍駐留が長期にわたっている

ことを示す。（芸者は登場しない。）ジェンダーの役  
割の問題が取り上げられている。

- (3) *The Teahouse*よりも、*The King*では、植民者と非植  
民者の相互理解・互惠関係がより親密に構築されて  
いる。

- (4)上記(3)と関連して、*The Teahouse*では、文明人のア  
メリカ人のGoing Native（現地化・ネイティブ化）  
現象が起こり、*The King*では、アメリカ化（文明化）  
現象が、顕著となっている。King KenjiとDuchess  
Nakasoneの米留学が大きく影響している。

名嘉山リサは、*The Teahouse*では、Tobiki村の住民、  
特に女性たちが、アメリカ民主主義を文字通りに実行  
し、「ハイブリッドでアンビバレントなオキナワ民主  
主義」が自然発生し、米軍の統治政策が「攪乱され  
てうまくいかなくなる」と指摘している（名嘉山  
p.148）。ジョン・パトリックの戯曲版を分析した  
Chizuru Saeki も同様な見解で、沖縄流の民主主義が成  
功した、と指摘している。

Both the film and play of *The Teahouse of the August Moon* described the harmonious relations between GI's and Okinawans through the American military officials' policy of *Okinawanization*. Okinawans succeeded in teaching American military officials about the *Okinawan way of democracy, not American democracy*. In reality, however, Okinawans in the early 1950s struggled to find their cultural and political identities while remaining under the influence of the U.S. foreign policy in Asia.

（Saeki pp.67-68 イタリック体は筆者による強調）。

しかし、多くの批評家が指摘するように、スナイダー  
やパトリックが、米軍占領政策を批判的にパロディ化  
する視座があったとすれば、*The Teahouse*における  
Tobiki村住民の民主主義の達成は、住民がアメリカ側  
に「オキナワ民主主義」を教えたというよりは、住民  
が一方的に植えつけられたアメリカ民主主義を忠実に  
遂行した結果であり、軍事最優先の米軍占領政府は、自  
らが主張するようにアメリカ民主主義を推し進めること  
ができないというパラドックスに陥っているとい

う意味でアイロニーは増幅されているのではないだろうか。アメリカ民主主義をアジアに浸透させる「民主主義のショーケース（a showcase for democracy in Asia）」としての位置づけの沖縄統治は、実は単なるプロパガンダに過ぎず、仮に文字通りに民主主義を実行すれば米軍統治政策に支障をきたすという現実、米軍統治下時代の沖縄の史実と一致する。つまり、スナイダーは、沖縄の現状を描写することなく、米軍統治の欠点を、アメリカ民主主義と相反する軍の論理を皮肉の形で喜劇的に描写してみせるのである。

*The King*において、スナイダーは、米軍統治下のアメリカ民主主義の理念と実行の矛盾・乖離をさらに際立たせ、アメリカ民主主義が住民の直接選挙によって否定され、王国（君主制）が選択されるという「究極的な民主主義」が施行されるという設定であり、両作品ともアメリカ民主主義の意味を問い直すという共通点がある。19歳の新しい王King Kenjiがアメリカ留学中にも関わらず、急遽呼び戻され、王位継承の式典で行う彼のスピーチは、アメリカ民主主義に対するスナイダーの逆説的な賛美・理想を反映していると思われる。

“King Kenji,” General Scheick said, and there was no happiness in his voice, “On behalf of the United States Government, I now turn the Nakashima Islands over to you.” There was a hush, a silence; and General Scheick, aware of it, turned to the Nakashima Islands dignitaries, certain that *the gravity of their mistakes was now becoming clear to them*. . . . King Kenji stood before the microphone, then all his teeth were flashed in a smile as he said in English, “You know, this has been quite an experience.” He paused. “But first of all I want to thank the Mr. General and the United States Government for letting us make *this mistake, I hope it will be a good one*.”

(Sneider *The King* p.65 イタリアン体は筆者による強調)

King Kenji自身が認めるように、Nakashima Islandsの王政復古の選択は、明らかにアメリカ政府の「失策」であり、王は、その究極的な民主主義の敢行に感謝し、

それが将来「良い失策」となることを希望するという笑いを誘う就任挨拶となっている。このような現実的にはあり得ない前代未聞の設定は、フィクションの力を信じるスナイダーの文学的特権を駆使した哲学的・政治的メッセージであろう。

### III. スナイダーの意図

*The Teahouse*が出版された当時、米軍占領下の沖縄の状況は、小説の中の牧歌的な様相とは大きく異なっていた。雑誌『タイム』（1949年の11月28日号）に掲載された有名な記事「沖縄—忘れられた島」は、フランク・ギブニーによって報告された。「米軍は沖縄人を被解放民族だとしてはいるが、米軍は占領中に沖縄人を時には日本よりもきびしく沖縄人を扱ってきた。（中略）沖縄戦は沖縄の農業・漁業・経済を完全に破壊し、島民が一世以上もかかって丹念に作り上げてきた段々畑を米軍のブルドーザーはたちまちにして押し潰してしまったのである」（宮城に引用 pp.80-81）。1945年の終戦に米軍統治が始まってから1960年までの沖縄の戦後復興は、1951年にサンフランシスコ講和条約締結後、日本本土が主権を回復して以降独立国として著しい発展をとげたことに比べ、沖縄の社会・経済状況は、ほとんど改善されなかったことは、スナイダーの沖縄小説を理解するために非常に重要である。*The King*が出版された翌年の1961年の1月に*Detroit Free Press*に掲載されたインタビューにおいて、スナイダーは、アメリカの介入が現地住民に行き届いていない、とアメリカの（占領）政策を痛烈に批判している。

I attempt to get across the point that our [the US] foreign aid programs are not reaching the people for whom they are intended. . . . We are going to have to figure out how to meet these people in terms of their own customs and religions, rather than ours. (Cook, Section D)

現地住民のニーズを満たす方法を見つけ出すべきであると主張するスナイダー自身の率直なコメントが示すように、彼の小説には、米軍が非西洋的な地域を統治する際への提案が盛り込まれている。Sarantakesはスナイダーの考えを次のようにまとめている。



In this lighthearted comedy, author Vern Sneider argued that the concerns that shared basic policies of the administration of U.S. military government on Okinawa were often inappropriate and had little to do with the interests of the population of the island. In short, U.S. occupation policies were ethnocentric. Although well-meaning, these policies reflected thinking dominant in Washington, D.C. at that time. He argued that when Americans on the island adhered blindly to them, they only ended up creating cultural clashes that made the situation worse than might have been case. (Sarantakes p.160)

自民族優越主義的にアメリカの文化や価値観を押しつけるのではなく、地元住民とその文化を十分に理解し、彼らが望むものを提供することが占領統治の成功の鍵である、とスナイダーのフィクションは示唆している。つまり、現地人の意思を尊重することが重要であるというメッセージが込められているのである。*The King* では、米軍将軍の口から温情的にその重要性を語らせるという設定をとっている (“... if you, as King, don't supply their wants, you're going to have an awfully unhappy bunch around here.

What are we going to do to turn your people into a nation of haves?” [p.194])。しかし、この将軍の言葉は、そのまま米軍政府自身にブーメランのように跳ね返って彼らの心に突き刺すものではないか。素朴な疑問は、アメリカ民主主義が否定される緊急事態になるまで米軍統治政府はどうしてNakashima Islandsの地元住民に彼らが必要としているものを与えなかったのか、ということである。スナイダーは、この物語の中で、アメリカ側のアメリカ民主主義の絶対的な盲信の愚かさを暗示させている。効果的な経済的援助がなければ、いくら在民主権の民主主義や自由を与えられても、住民としては生活基盤の充実を優先したいと考えるのは当然の帰着ではないだろうか。

2 作品から明らかなことは、スナイダーは、米軍が沖縄人・被植民者にとって「解放軍」になるべきであるという立場をとっていることである。*The King* でも*The Teahouse*の主題を踏襲していることは

明らかであり、スナイダーは、民主主義の理想主義 (democratic idealism) を、極端な形でフィクション化しているといえるであろう。小説が出版された1960年当時では、そのような民主主義の理想は、一般のアメリカ人読者には信じられていたと思われ、有効な手段と考えたのではないだろうか。

地元住民が君主制を選択するという設定に関して、Sarantakesは、1956年の那覇市長に当選した共産党系の人民党党员である瀬長亀次郎事件が基になっていると指摘している (Sarantakes p.177)。スナイダーの物語では、共産主義による自治権の確立というのは、1960年では、マッカーシズムの猛威は下火になってはいたが、アメリカ国内の共産主義アレルギーを考慮して、共産主義体制の選択ではなく、中国や日本の植民地期間中に途絶えていたかつての君主制・王政に回帰するという設定になっている。この共産主義化の脅威は物語の核心的な点となっており、Nakashima Islandsの住民がアメリカ民主主義を拒否した後、王国が共産化することを未然に防ぐことがアメリカ当局の緊急の課題として物語は進行していく。

しかし、あまりにも理想的かつ牧歌的な物語展開は、明らかに荒唐無稽な印象は拭えない。特に、共産主義の拡大を懸念するアメリカ当局とKing Kenjiとの会話のやりとりは、典型的な場面であろう (Snieder *The King* pp.242-245)。将軍のGeneral ScheickとGeneral Mosby Winthropが若い王位継承者に対し、島の共産主義者によって王政が転覆されると警告すると、King Kenjiは、住民投票の選択肢に共産主義体制の項目があつたにもかかわらず、なぜ Nakashima Islandsの住民は共産主義体制に投票しなかったのか、と将軍たちに質問し、住民は共産主義に戻るつもりはない、と述べる。将軍たちは「やはり君らは共産主義者だったのだな」と問い詰めると、若い王は1563年には確かにそうでしたと答える。将軍らがその当時、共産主義の概念は存在しなかったはずだ、と反論すると、若い王は、King Gihonは知っていたと答え、その根拠として巻物の記録の「実験」 (the Experiment) という項目に書かれているから、歴史研究家のMr. Yamaguchi Kieiに確かめるように勧める。King Kenjiの説明によれば、1563年に始めたこの「実験」は最終的に失敗し、住民にとって共産主義は、もうたくさんだ、という思いがあるという。共産

主義を忌避する将軍たちは、この情報が事実であれば、クリスマスに本当に欲しかったプレゼントの何倍も良いものをもらったようなものだと感じる。しかし、それでも慎重に警戒心から次のように若い王に質問する (Snieder *The King* pp.243-244)。

“But what about the pinks? Surely you must have some pinks around somewhere.”

“Oh, no, Mr. General. We don't have any of those either.”

“Not even a few?”

“No. After the experiment in 1563 . . . well, we consider communism as archaic form of government. The monarchy is the modern form.” (Snider *The King* p.244)

「共産主義は古風な政治体制であり、君主制政治が近代的な政治体制」というのは、笑いを誘う両者のやりとりを象徴している。また、物語の結末では、新しく設立されるいくつかの会社の所有形態に関して、将軍らが、King Kenjiに問いたす場面がある。

“. . . Now there's *The King's Own Livestock Company*, the *Royal Seed Company* and the *Crown Land Company*.”

“Oh, do you think I own too much?” Kenji asked. “Does it sound as if I have a monopoly?”

“That's not it. What we want to know is, are you, *The King*, owing these as the government or as a private individual?”

“Does it make a difference?”

“It certainly does. If you're owing them as the government, it's socialism. But if you're owning them as private individual, it's capitalism.”

“Oh, I see,” Kenji said. “In the case, I'll own them as a private individual. I'll be a capitalist.” General Scheick held out his hand. “Thank you, my boy, I can't tell you how this relieves our minds.” (Snieder *The King* p.285)

この対話には、将軍らの杓子定規的で二項対立的な判断基準に沿ったアメリカ人の強迫観念的な共産主義や社会主義への嫌悪感が反映されており、独占企業体（独裁政権）であっても資本主義でさえあれば容認するという、コミカルな場面設定となっている。

しかし、君主制へ戻ることを住民が選択するもう一つの理由は示唆されている。それは、住民投票が行われる時点で、アメリカ軍の駐留は、10年以上経過し、現地の人材育成の目的でアメリカ本国の大学へ奨学生を送っているにもかかわらず、経済的に貧困にあえいでおり、電気などのインフラ整備もほとんど進まず、食事もサツマイモが主食であるという設定である。特に興味深いのは、軍事基地についての言及がなく、飛行機が離着陸できる滑走路がないようで、隣の沖縄からの飛行機は水陸両用飛行機であり、川に着水する (“The amphibian was circling wide, getting ready to set down on the Tamsui River, there being no airfields on the Nakashima Islands”

[p. 60] : “there being no electricity for the civilian population” [Snieder *The King* p.24])。また、電気が通っていないため、King Kenjiが留学中に収集したアメリカン・ポップス（流行歌）のレコードをかけることができないという、エピソードがある (Snieder *The King* pp.147-148.)。つまり、米国の統治地域への財政援助が不十分である、ということが暗に示唆されている、と解釈しても良いであろう。このような状況下では、「黄金時代」の基礎を作りかけていた340年前の王国時代にノスタルジアを住民たちが抱いていたとしても不思議ではないが、アメリカの読者には、アメリカ民主主義の拒絶は容認しがたい設定に違いない。このような描写やストーリーの展開は、沖縄の現実からかけ離れすぎているため劇画的な印象を受ける。例えば、出版当時の書評ではこの小説を「超一級品のほら話」 (“crackerjack yarn” [Cromie E8])とか、あるいは「純粹に素晴らしいパロディ風刺」 (“purely wonderful spoof” [Butcher E4])と評している。しかし、スナイダーは、空想的な軽い作品しか書けないのではなく、政治的なシリアスな作品を書いている。*The Teahouse*に続く*A Pail of Oysters* (1953) は、第二次世界大戦後の日本による植民地支配から解放された台湾の混沌とした政治状況を描いており、非常に重たい政治小説となっている。特に、この小説では、主

要な登場人物二人（台湾人）が、共産主義者だという嫌疑をかけられて殺害されるなど、空想的、牧歌的な要素が全くないリアリズム的な作品であり、当時の蒋介石が率いる中国国民党政権にとって、好ましくない小説ということで、台湾・アメリカ両政府、両国のメディアから無視されるほど政治色の強い小説である<sup>3)</sup>。

#### IV. 非現実的・空想的設定の意義

なぜ、スナイダーは沖縄（米軍駐留地域）の米軍基地から派生する諸問題を現実的に描写せず、牧歌的な空想的な物語形式を採用したのであろうか。この点に関して、少なくとも下記の3点を指摘することができるであろう。

- (1)過去の成功体験：『*The Teahouse*』の商業的成功からライト・ノベル的路線を踏襲した。
- (2)沖縄人の気質・性格：Nakashima Islandsの住民は、スナイダー自身が出会った沖縄人の南島のな温かなキャラクター（集合的性格・気質）が牧歌的なストーリー展開にフィットしている。（アメリカ軍に暴力的な手段で抵抗しない沖縄人）
- (3)相互理解・互恵関係の重要性：アメリカ人と現地人の相互理解と平和的な友好（互恵）関係を構築すべきであるという強い理念がスナイダーにあった。特に、アメリカ側からの自民族中心主義的な価値観の強要や恩着せがましい援助のやり方に問題があるということを見抜いていたのではないか。

上記(1)の点に関して、アジアのことをアメリカ人に知らせるという意味で、『*A Pail of Oysters*』の政治色の濃い写実的な描写よりも空想的なナラティブが効果的であると考えたのではないか。政治的かつ現実的な『*A Pail of Oysters*』の商業的失敗と批評的不評は、若手作家としてのスナイダーに強い影響を与えたようである。反蒋介石体制的、親共産主義的とレッテルを貼られた小説に関して、スナイダーは読者に手紙を送っている。

In an attempt to discredit the book [*A Pail of Oysters*] an American official wrote to someone over here that, in effect, I was on Formosa about two weeks, stayed with some

British people, never got out of their house or out of the Friends of China Club. The fact is, I was on Formosa, talking with people in all walks of life. . . . I'm afraid my writing about Formosa is over, at least for the time being.

I have been branded 'an unfriendly writer who distorts the truth.' So with that label can't you imagine my walking into a Chinese Nationalist Consulate and getting a visa.

(Benda 'Introduction' p. xviii)

台湾国民党（KMT）とアメリカ当局に要注意人物としてレッテルを貼られ、反アメリカ的、反民主主義的な作品は、彼の創作活動を著しく制限することをスナイダーは経験している。(2)に関して、パトリックが翻案したブロードウェイ劇や映画版『八月十五夜の茶屋』が描いたオリエンタリズム的なステレオタイプの沖縄人（アジア人）ではなく、スナイダーが実際に出会った沖縄人を等身大で描くという意図があったのではないだろうか。激しい戦火を経験したにもかかわらず、たくましく（しなやかで、かつしたたかに）生き抜く沖縄人から学んだ英知と現実感覚に光をあて、アメリカの価値観とは異なる「受容の英知」の重要性を描いている。(3)に関して、『*The Teahouse*』と同様に、『*The King*』でも米軍および米軍統治に対するやんわりとした風刺が効いているが、スナイダーのメッセージは、明らかにアメリカと現地の友好的な関係の構築（相互理解と相互作用の重要性）である。それは、合衆国政府が極東の地域において民主主義を浸透させ、アメリカ的価値観を理解してほしいという冷戦時代のアメリカ市民の願望が反映されていると言っても過言ではないだろう。つまり、スナイダーは、外国における米軍統治に批判的であっても、軍隊組織を否定することはなく、一般的なアメリカ市民と同様、アメリカ民主主義の根本的な理念・理想を信じていたのである。アメリカ民主主義の良心・正義をアメリカ人読者に再認識させることによって、アメリカのアジア政策の不十分さを読者に喚起させる意図があったのではないだろうか。ポストコロナル批評理論から見れば、在沖基地問題を完全に捨象することは、スナイダーの作品の弱点として捉えることが可能だと思うが、スナイダー本人としては、



写実的で政治的な作品が無視されるのであれば、多くの読者に読んでもらうことを期待して、空想的な作品であっても修辭的手法を巧みに駆使することによって、アメリカが介入したアジアの政治状況や異文化接触の本質を伝えたかったのではないだろうか。

しかし、両作品のストーリー展開において、アメリカ人（軍人）と地元住人の交流が非常に牧歌的に描写されているとはいえ、スナイダーは、被占領民・被解放民族が自律・自立するためには経済的な発展が必要であるという確固たるメッセージをテキストに込めている。*The Teahouse*では、物語の後半に茶屋の経営を中心としたTobiki村の経済復興が、時には物々交換という原始的な経済活動の形をとりながら展開され、*The King*では、住民の模合のシステムやアメリカ経済の投資組合を導入し、Nakashima Islandsの経済が発展していく政策がとられ、地域住民とアメリカ人投資家（ほとんどが軍人の妻たち）の両方が利益を得るために試行錯誤する様子が描かれている。特に、後者の物語の後半は、ほとんど経済問題への取り組みで占められている。スナイダーは、特に、模合のシステムを気に入っていたようで、*The King*が出版された同年の12月に“Christmas Wish for Asia: A Prosperity of Pigs”というタイトルで短いエッセイを*Chicago Daily Tribune*に寄稿している。その中で、沖縄の模合のシステムは、経済的に貧しい国では、とても有効に機能し、一つの案として、投資組合は模合で集めたお金でメスの豚を購入し、その豚を農家に飼育させ、その豚が子豚を産んだとき、2匹のメスの子豚をもらうことによって「借金」の返済に充てるという方法をとれば、多産的な豚は、農家と投資組合に両方にとって良い投資対象になるという。大恐慌時代のミシガン州の農民がこの方法で大きな成功を収めたという事例を挙げている（Sneider “A Christmas Wish”）。*The King*でも「模合のお金を取ると何を購入するのか」、とElwoodに訊かれた警察署長のYoshimitsu Matsumotoは、「小さな子豚一匹を購入する」といって、アメリカ人たちを驚かせるが、“A pig is your bank account. It means having the money out in the pen to buy what you want”

（Sneider, *The King* p. 44）とその豚購入の意義（「豚は銀行預金のようなものだ」）を述べるシーンがある。また、終戦直後、激しい沖縄決戦で焦土となってしまう

た沖縄に豚が不足しているとしてハワイの沖縄系移民が船で豚を送ったエピソードを合わせて考えるとスナイダーの沖縄リサーチの緻密を感じさせる設定であろう。つまり、ストーリーの形式やプロットの展開は、極めて非現実的に映るかもしれないが、個々の事象の詳細な描写や問題解決の方法は現実・史実に即した提案であることを軽視してはならない。

## V. 結語

*The King*には、米軍沖縄統治に関わる諸問題の記述が皆無であり、あまりにもリアリティに乏しく、説得力に欠ける印象になっている。しかし、同時に、沖縄のようなアジアの貧困にあえぐ発展途上地域における経済的改善策をスナイダーが丁寧に描いていることは、着目に値する。Jacqueline Lewinはスナイダーの作家としての力量と独創性を高く評価して次のように述べている。

And it is to the author's great credit that he manages to use as much sense as humor, and considerably more logic than coincidence to solve the seemingly insurmountable problems. The U.S. Government comes in for its conventional share of ribbing, and perhaps the well-meaning but bungling general has become too much a stock character these days, but the other characters and the plot itself contain enough originality to overcome these faults.

（Lewin A 63）

また、P. Hassは、この物語の綿密な構成、人物造形を説明し、楽しいながらも、同時に深刻な問題を扱っている点を指摘し、スナイダーの要点を強調している。

Sneider has created a happy gallery of characters from Kenji's wise old grandmother to health-foods-happy Scheick, from sergeants suddenly elevated to generals to bewildered spud-growers become dukes. All of it is fun and all of it still deadly serious. The point it makes, with very great charm, is the point made in “The Ugly America” that you fit

the aid to the people, not the people to the aid. Who knows? Perhaps in time Washington will catch on. (Hass. D1)

*The Teahouse*では、フィズビー大佐が、住民にとって彼自身が「侵略者」ではなかろうか、と内省する感覚があるのに対し (Sneider *Teahouse* p.168, p.225, p.238)、*The King*では、登場人物のアメリカ人にそのような部外者としての自覚は表現されていない。また、*The Teahouse*では、沖縄女性が芸者となって贈り物として米軍人に送られるという異文化への理解不足と誤解が物語の重要な核となって展開する中で、米軍人が地元の文化や慣習を理解し、そして共鳴していく、いわゆる「現地化現象 (going native)」が描かれている。*The King*では、直接投票という民主主義の恩恵を受けながら、前近代への回帰を意味する非民主主義的な君主制を選択するという展開へと発展していく。この二つのプロットが、非アメリカ化的な意味合いを持ち、両作品の米軍および米軍統治に対するやんわりとした風刺的ニュアンスがある。両作品とも地元住民とアメリカ人の相互理解・協調行動が前面に描出されており、スナイダーは、明らかにアメリカと沖縄のような異文化地域との友好な関係を重視している。米軍統治時代の沖縄をリアリステックに描いた小説にE. A. Cooper の *B. C. Street* (2007) がある。スナイダーの沖縄小説とは対照的に、海兵隊隊員であった著者本人の沖縄滞在の実体験を基に沖縄文化と1960年代前半の在沖米軍基地をありのままに報告する記録文学的なフィクションとなっており、在沖米軍基地の問題点や沖縄からの基地撤去を示唆している作品である。スナイダーの二作品とクーパーの小説を比較したとき、もっとも顕著な差異は、沖縄女性の表象の仕方であろう。

スナイダーが沖縄の女性 (Nakashima Islandsの女性) をアメリカ人との恋愛対象 (性的な対象) として描いていないのに対し、クーパーは、コザや普天間の飲み屋街で働く沖縄女性・売春婦とアメリカ軍人との親密なかかわりを描いている。また、アメリカ軍人が沖縄人に対する蔑視観が全編を通して描かれている。西洋人にとってのステレオタイプ的な芸者のイメージを払しょくするという点で、*The Teahouse*は評価できると思うが、同時に、駐留米軍人とNakashima Islandsの女性との関係が全く描かれ

ていないことは、基地のある沖縄 (日本・韓国) の現実からかけ離れているとして批判されても仕方がないのであろう。しかし、スナイダーの沖縄物語で、女性が売春婦として登場しないことは、暗に沖縄女性を性の対象として描かないというスナイダーの戦略的な意図があったという可能性も否定しがたい<sup>4)</sup>。さらに*The King*では、NYの大学に留学していたDebbie Nakasoneが、女性の社会問題に大きな関心があり、女性の権利や役割が十分に満たされていない男性社会に不満を募らせていることが描かれている。また、アメリカ軍属の女性たちのグループが、投資組合を設立し、Nakashima Islandsの経済再建に貢献する様子もストーリーの中心的な逸話の一つとなっている。女性の社会進出や自立の肝要さを示唆している点でも、興味深い作品となっている。

スナイダーとクーパーの小説は、どちらも米軍占領統治の矛盾・不条理さに焦点を置いているという基本的な共通点を共有しながらも、その表現方法・形式においてほとんど対極的に異なっている。スナイダーは、フィクションの力を利用することで彼の信じるメッセージを訴える手法であるのに対し、一方で、クーパーは、彼の沖縄駐留中に体験・観察した沖縄の現実をジャーナリストのように忠実に描写して、沖縄の米軍駐留の実相を暴露している。

Saekiが的確に指摘しているように、沖縄は天然資源もなく、小さな島々で構成されており、天然資源が目的で外国が従来の意味での植民地とする理由がない

(Saeki p.52)。沖縄の地政学的条件がアジアの共產圏の拡大を防ぐという意味で、「軍事植民地」としての価値を見出しているのであれば、統治国のアメリカは地元住民に対し、十分な経済支援を行うことは肝要であり、かつ地元の人々や文化を尊重することが必要であるとする考えが、スナイダーの両作品の底流に流れている。冷戦下の政治状況を鑑みれば、*The King*は、異文化理解と互惠関係の重要性を支えるアメリカ民主主義を推し進める究極の「脱植民地化」

(decolonization) のテキストとして読まれるべきでストーリーであった。しかし、それは沖縄に駐留する米軍にとって不都合な物語であることを意味し、それゆえにアメリカの援助を受けて蒋介石に統治されていた台湾に対するアメリカ政策の不十分さを暴露した *A Pail of Oysters* と同様、今日まで*The King*は、アメ

リカで無視され続けたのである。

スナイダーはアメリカ民主主義の良心・正義を信じ、自分の作品がアメリカの海外での駐留政策に何らかの影響があることを期待していた、と思われる。そのようなスナイダーの沖縄（アジア全体）に対する共感が、在沖アメリカ軍人・軍属によって理解されるのか、はなはだ疑問である。将来の沖縄の地政学的な利用を考慮すれば、日米両政府によって、スナイダーの沖縄小説は、夢物語として一笑に付する作品として無視され続けるであろう。しかし、米軍の沖縄占領政策を再検証することは、アメリカの海外政策の実情を映し出す有効な手段であると思われ、戦後70年以上継続している在沖米軍駐留の歴史を再考する意味で、スナイダーの作品は一読に値する価値の高いメッセージが込められていると確信している<sup>5)</sup>。

## 注

- 1) 文学研究におけるテキスト分析理論では、原作者の意図・メッセージは、無視される傾向にあるが、作品の研究初期段階では、作者の意図・メッセージは基礎的な情報として考慮されるべきであると考えられる。スナイダー自身*The Teahouse*にはメッセージがあることを『ニューヨーク・タイムズ』に寄稿したエッセイ（“Below *The Teahouse*”）で明確に述べている。しかし読者の中には、ジョン・パトリックの戯曲に大きく影響を受け彼のメッセージを理解せず小説の本質的な要点を捉えていない者も多く、スナイダーのメッセージは誤解されながら、長年忘れ去られていた。
- 2) *Oxford Research Encyclopedia of Literature*が2017年5月から“Okinawa in American Literature”の項目をオンライン上にアップしている。ブラウン大学名誉教授であるSteve Rabsonが執筆を担当している。そこでは、*The Teahouse of August Moon*の小説・演劇は、詳細に紹介されているが、*The King from Ashtabula*は全く言及されていない。（<http://literature.oxfordre.com/view/10.1093/acrefore/9780190201098.013.212>）
- 3) スナイダーは、1952年に沖縄の歴史書を執筆し、著名な台湾研究者のGeorge H. Kerrへの個人的な手紙の中で、出版前の*A Pail of Oysters*の反応を次のように書いている。“I think this novel will blow the roof off things, Mr. Kerr. My viewpoint will be strictly that of the Formosan people, trying to exist under

that government. Certain editors who have seen the outline and sample chapters have termed it the most powerful thing they have ever read, which means this to me---that I'm on the right track. And that, maybe, in my small way, I can do something for the people of Formosa” (Benda “Empathy and Its

Others” p.52). スナイダーは、出版社の反応が彼の望んでいたものであり、台湾人に何か貢献できるのではないかと期待していた。Jonathan Bendaの分析によれば、スナイダーは高度に政治的な目的を持ってこの小説を書いたことを報告している（*A Pail of Oysters* “attempted (as he himself in his letter to George Kerr) to intervene in the US relationship with Taiwan by portraying the current government of Taiwan as being unworthy of US support” (Benda p.54) . . . [and] “attacked the KMT government and implied that American support of this government was misguided” [Benda p.57]). また、インドからの移民であり、アメリカ国内で作家として活躍したSantha Rama Rauは、この小説からスナイダーの政治的な不正義への感覚が鋭敏であることを読みとっている（“Vern Sneider has an acute sense of political injustice, and certainly he writes with enormous affection about the Formosans. He provides us with a great deal of action, violence and brutality” [Rau p.4]).

- 4) ジョン・パトリックによる戯曲では、芸者ロータス・ブラッサムとフィズビー大佐の恋愛関係性がほのめかされているが、原作の小説では、そのような恋愛関係はなく、沖縄人男性Seikoと芸者The First Flowerとの恋愛関係と結婚が描写されており、芸者の売春婦としてのイメージは全くない。スナイダーによる芸者の脱セクシャリティー化については、渡久山（2013年 pp.20-22）を参照。Glassmeyerは、スナイダーの原作では芸者の神話的なイメージが巧妙に抑えられている、と指摘している。“Sneider’s novel carefully hedges its narrative strategies against codification.

The novel satirizes the mythological characters of geisha and Western military man, undercutting readers’ reliance upon them” (Glassmeyer p.403) ;

“The novel cannot invoke the figure of the geisha without invoking the mythology that surrounds



her, yet Sneider's narrative carefully deflates myth and misconception via costume, characterization, and plot. First Flower and Lotus Blossom are simply smart, capable, and beautiful women, and their fit with a mythic past is carefully dismantled"

(Glassmeyer p.418).

- 5) Chizuru Saeki は沖縄に対するアメリカの態度を検証する意義を次のように述べている。 "... examining the U.S. attitude toward Okinawa, as well as the foreign policy used justify American behavior in the country-less land Okinawa, which belonged neither to Japan nor to the U.S. at that time, illustrate the hypocritical and contradictory ideology of U.S. foreign policy in the world" (Saeki p.66).

## 参考文献

- Benda, Jonathan. "Empathy and Its Others: *The Voice of Asia, A Pail of Oysters*, and the Empathetic Writing of Formosa" *Concentric: Literary and Cultural Studies*. Vol.33, No.2, (September 2007), pp.35-60.
- , "Introduction" in *A Pail of Oysters*. Manchester: Camphor Press Ltd., 2016. pp. xi-xx.
- Butcher, Fanny. "Highlights of 1960's Fiction" *Chicago Daily Tribune*. (December 4, 1960). E4.
- Cook, Louis. "An Author Leads the Lonely Life" *Detroit Free Press*. (January 8, 1961).
- Cooper, E.A. *B.C. Street*. Nebraska: iUniverse. 2007. Cromie, Robert. "Wish for Publishers: Better Novels" *Chicago Daily Tribune*. (December 4, 1960). E8.
- Glassmeyer, Danielle. "'The Wisdom of Gracious Acceptance': Okinawa, Mass Suicide and the Cultural Work of Teahouse of the August Moon." *Soundings: An Interdisciplinary Journal*. Vol. 96, Number 4, 2013. pp.398-430.
- Hass, P. "Delightful Spoof of Our Foreign Aid in Far East" *Chicago Daily Tribune* (November 6, 1960). D1. Lewin, Jacqueline. "Another 'Teahouse'" *The Boston Globe*. November, 13, 1960. A 63.
- Rau, Santha Rama. "Intrigue in Formosa" *New York Times Book Reviews*. (September 27, 1953) p.4.
- Saeki, Chizuru. "American Cultural Policy toward Okinawa 1945-1950s" *Japan Studies Review*. Vol.12. (2008). pp.51-68.
- Sarantakes, Nicholas Evan. "The Teahouse Tempest: The U.S. Occupation of Okinawa and *The Teahouse of the August Moon*." *Journal of American-East Asian Relations*. Vol. 21 (2014). pp.156-183.
- Sneider, Vern. *The Teahouse of the August Moon*. New York: Putnam, 1951.
- , "Below *The Teahouse*" *New York Times*. 11 Oct. 1953 XI.
- , *The King from Ashtabula*. New York: A Dell Book, 1962.
- , *A Pail of Oysters*. New York: Putnam, 1953.
- , "A Christmas Wish for Asia: A Prosperity of Pigs." *Chicago Daily Tribune* (December 4, 1960). E18.
- 渡久山 幸功 「ヴァーン・スナイダーの小説『八月十五夜の茶屋』—米国占領軍政府に見捨てられた警句・教訓—」『地域研究』(沖縄大学地域研究所) 第11号 (2013年3月) pp.17-34.
- 名嘉山 リサ 「ティーハウス・デモクラシー —ヴァーン・スナイダーの『八月十五夜の茶屋』における民主化—」 *Southern Review* No.27. (2012年12月) pp.139-155.
- 宮城 悦二郎 『占領者の眼—アメリカ人は<沖縄>をどう見たか—』那覇: 那覇出版社 1982年。

## 謝辞

ヴァーン・スナイダーの作品及び先行研究の収集に関して、国立沖縄工業高等専門学校 名嘉山リサ准教授に、ご協力していただいた。ここに感謝の意を記したい。本研究は科研費(研究課題番号26370322)の助成の成果の一部である。

## ***The King from Ashtabula:* Vern Sneider's Second "Okinawa" Novel**

**Yukinori Tokuyama**

### **Abstract**

Nearly a decade after the huge success of his first novel *The Teahouse of the August Moon* (1951), based on his actual experiences in Okinawa during the Battle of Okinawa, Vern Sneider (1916-81) published his second "Okinawa" novel, *The King from Ashtabula*, in 1960. Even though this story is set on the fictional Nakashima Islands, it is evident that culture, customs, history and geography of those islands are the same as, or very similar to, those of the Okinawan islands. The narrative describes how terribly upset the US military occupation government is by the result of a local referendum on the future political system: the people decide by their own free will to reestablish the kingdom which was demolished in 1620 and which has remained colonized by China, Japan and the US for the past 340 years: they do not choose a democratic nation as the US military government has confidently anticipated even after the 15 years of American occupation.

Once again, Sneider intended to focus on regions occupied by US troops to reinforce how significant it is for the US occupation to help locals reconstruct their war-devastated regions. In *The Teahouse*, the American personnel work hard, trying to help Okinawa's postwar economic rehabilitation. In writing *The King*, Sneider furthered his artistic ambition to promote his philosophy, suggesting that Americans respect different cultures and people's wishes without imposing American notions and ideals on those who desire to live their own lives in their own ways. To achieve this purpose, the author dared depict natives defying American democracy with an implied criticism of American occupation policy in Okinawa.

On the other hand, it is important to note that, unlike *The Teahouse*, Sneider underscored a mutual understanding and reciprocal cooperation between Americans and natives, rather than showing the occupiers "going native," in order to make the economic and political autonomy of the Nakashima Islands possible. By describing Okinawan culture and customs in this novel more thoroughly than in *The Teahouse*, Sneider seemed to commit himself to understanding Okinawan culture and custom more thoroughly than when writing his first Okinawa novel. In this way, the second Okinawa novel functions to introduce American readers to Okinawan culture, customs and wisdom more clearly and more authentically than *The Teahouse* does. In a political sense, this narrative also serves to implicitly divulge that insufficient aid has come from the US government to Okinawa in the 1950s. Sneider employed the same way of fantastically depicting the Okinawan society for *The King* as he had previously done for *The Teahouse* but the former is much more political than the latter and critical of the US occupation policy. Probably by writing fantastically and unrealistically, it is extremely unfortunate that *The King from Ashtabula* has been totally forgotten among American readers. However, his second Okinawa novel is worth reading especially in terms of understanding Sneider's real intent and his attitude toward Okinawa and the US occupation policy for the Okinawa islands. I conclude that this narrative should be read as one of the rare texts that support "decolonization" of the small countries / nations by promoting American democracy in a true sense.

